反障害通信

２４．10．３　　158 号

第四の被ばく事件に関して

９月 15 日の日曜に、ＮＨＫで第四の被ばく(ヒロシマ、ナガサキ、第五福竜丸に次ぐ)と言われた、海上保安庁の巡視船の被ばくの問題を取り上げていました。アメリカではシークレットになっていた文書がある一定の年数を過ぎるとシークレットが解かれるという制度があり、そこで得た情報元にして作ったドキュメンタリー番組です。

アメリカが太平洋で核実験を繰り返している中で、海上保安庁の巡視船を放射線の線量をしらべるために派遣し、被ばくしたという事件です。船上の線量を調べ、その数値が規準よりそんなに大きくないのに、船員の多くが白血球の数値が減少し、そのうちのひとりが、急性白血病で亡くなっています。そもそも、核被ばくの安全基準というのは、政治的意図をもって、その目的のために作られるということがあります。ここでは、第五福竜丸の被ばくということで核実験が停止されていたのを再開するために、アメリカサイドから要請されて、日本の科学者が、核実験を再開するために核汚染の「安全」基準ということを作ったということが、日本の科学者がアメリカの機関に送った手紙が公開されてその付度科学の実態が暴露されたということです。まさにＩＡＥＡや日本の原子力規制委員会が「推進機関になっている」と批判されていることに通じることです。「やってはいけない」制限の規準という考え方ではなく、「どこまで許されるのか」という規準を作るということは、政治家・企業の経営者の意向に合わせて規準を考えるというまさに御用科学者の考え方です。このひとたちには科学者としての「倫理」など全く無いようです。その基準によって、放射線汚染の数値が少ないのに、白血球の数値が下がったひとが多くいて、急性白血病で亡くなったひとも居たのに、「因果関係はない」として隠蔽されてしまいました。この被害の実態は政府・マスコミによって隠蔽されてしまったのです。

この事件で、そもそも核実験の汚染の実態を調べるということで、政府・海上保安庁が十全の防禦態勢も作らないで、巡視船を出したということ、そして汚染された甲板を海水を使って洗浄していることなどの事態が信じられないことです。アメリカが砂漠で核実験をしていたときに、爆発させた地点へ自軍の兵士を行軍させ被ばくさせた、「アトミック・アーミー」の事件を想起させます。そもそも「大量破壊兵器」のもつ意味（核の抑止論ならず、核脅迫力）とともに、軍事の論理・政治の論理の非情さを徹底的に批判することです。

もう一つ、そもそもわたしがずっと取り上げている「因果論」自体の問題があります。コロナウィルスのワクチンの副反応ということで連発していた「因果関係――判定不可能」という日本の政治家・忖度学者の論理自体への批判があります。線形モデルの一次関数的、20 世紀までの科学でしかない、現在 21 世紀的には非科学的な「因果論」で基準なるものを主張するので、被害の実態がとらえられないということもあります。今、「黒い雨」訴訟で、

内部被ばくの問題とかいろいろな「函数的連関態」（註１）に通じる変数捜し的論考が出ています。ワクチンの副反応の変数捜しが、アメリカの科学者たちの間で始まっているという話も出ていました（どこまでちゃんとやっていたか・やる気があるのかは不明です）。また、気候変動問題でのシュミレーション・モデルということで、コンピュータを使った研究もあります。もっと掘り下げた被害の実態究明ができることです。そのことはそもそも政治がきちんと補償・保障をするのではなく、補償をできるだけしないように科学者が忖度的活動に終始していることもあるのです（註２）。

それは、そもそも政治の責任ということが最も問われる政治家が一部の野党政治家を除いて、最も責任感も倫理観もない、権力掌握願望に取り憑かれた自分ファーストの政治家だということが、今回の、自民党総裁選や立憲民主党の代表選でも視て取れます。

政治を根本的に改めないと、政治不信から泥沼のニヒリズムに陥っていきます。

マスコミが権力チェック機能を果たせない中で、色んな情報サイトが生まれ、ＳＮＳでの情報発信も出てきています。できることからやっていくしかありません。わたしも発信を続けます―

（註）

１　これは、廣松さんが近代的世界観からパラダイム転換するに当たり、新カント派とされるロッツェやカッシーラーの「函数的連関態」の概念を援用していることで、そこから、実体主義的な世界観に変わる関係の第一次性に根差した事的世界観を定立しています。そこにおけるキー概念が「（確率）函数的連関態」です。すでに［廣松ノート］が主著『存在と意味』に入っているので、少しずつこなれた説明ができていければと念っています。

２　こんなことを書いていると、補償を十全しようとすれば、財政が破綻するという話が出てきます。そこで、ベーシックインカムの話が一方で出てきます。ただ、注意が必要なのは、竹中平蔵新自由主義者とそれに同調するひとたちが「ベーシックインカム」の話など出しているのは、福祉切り捨てのためのベーシックインカムで、一定の金の給付でそれでいきられないひとは死ねという論理です。自民党の総裁選で石破候補が、「基本所得補償ではない、基本サービス」という概念を出していました（彼が出しているのは、およそごまかしの論理でしょうが）。福祉を巡る論争は、「基本的人権」の「生存権保障」の問題として論争されてきました。「福祉は権利か恩恵か」ということです。「最後の救済手段」としての「裁判闘争」で、最高裁まで行くと憲法論争になり、「福祉関係裁判」は、福祉は権利か恩恵かということで争うことになるのですが、最高裁判決の「立法・行政の裁量権」ということで、結局「恩恵としての福祉」に落とし籠められ、負けてきた歴史があります。三権分立を機能させる改革が必要になっています。

（み）

（「反差別原論」への断章」（88）としても）

読書メモ

［廣松ノート（６）］の『物象化論の構図』の４回目です。

たわしの読書メモ・・ブログ 670［廣松ノート（６）］

・廣松渉『物象化論の構図』岩波書店 1983（４）

Ⅳ　自然界の歴史的物象化

「マルクス主義の自然観といえば「所詮は十九世紀の自然科学的世界像を mutatis mutandis[適当な変更を加えて]追認したものにすぎない」という暗黙の了解が人口に膾炙*(「かいしゃ」のルビ)*されているように見受けられる。斯くの如き既成観念が拡張した経緯には自称・他称の“マルク主義者”たちの論者が与っていることも否めない。某々国の官許マルクス主義教程ないしその義疏*(「ぎしょ」のルビ)*のごときは、戯画に堕した“弁証法”＝プロクルステスのベッドに截りあわせてはあるが、内実的には古典物理学的自然像の一変種という印象を賦*(「あた」のルビ)*えたとしても、蓋し無理からぬものがある。／翻って惟えば、しかし、マルクス・エンゲルスの場合、ヘーゲルの弁証法的な自然哲学との関係は姑*(「しばら」のルビ)*く措*(「お」のルビ)*くとしても、前世紀の中葉、まさにドイツの読書界を風靡*(「ふうび」のルビ)*したいわゆる俗流唯物論(これこそ自然科学的唯物論の一典型)との厳しい対決*(註)*を通して理論的構築がおこなわれている。この一事に鑑みても、マルクス・エンゲルスが自然科学的世界像を安直に追認したとは考え難い筈である。現に彼らは、近代哲学的了解の超克、新しい哲学的世界観の模索を公然と標榜したフォイエルバッハの提言を承けており、思想形成史上の経緯からいっても科学主義的 Objektivismus の世界像(およびこれと双対をなす人間主義的 Subjektivismus)の地平を先駆的に踰越*(「ゆえつ」のルビ)*すべき問題状況下におかれていた。著者が顕揚したい所以もこの案件に懸っているのであるが、マルクス・エンゲルスの原像に就こうとするかぎり、いわゆる科学的実在論の構図を誣*(「し」のルビ)*いる既成観念は、この際、抜本的に革めらるべきであると考える。／本稿の限られた紙幅内ではマルクス主義的自然観の体系的構成を図ることは抑々*(「そもそも」のルビ)*期しがたいが、とりあえずマルクス・エンゲルスの自然了解の基本的構制を摘録しつつ、一考を煩らわすべく捨石を投じておきたいと念う。」206-7P

(註)　「俗流唯物論との厳しい対決」――「俗流唯物論 Vulgärmaterialismus というとき、人はカール・フォークト、ヤコブ・モレスコット、ルードヴィッヒ・ビュヒナーたちを思い泛かべ、「膀胱が尿を……するごとく、脳髄が思想を分泌する」という迷文句を連想することであろう。しかし、この悪名高きナンセンスは、一部無責任な哲学者、評論家による歪曲であって、本人たち自身は次のように書いていた。」208P *とドイツ語文が引用され、それにコメントしつつ*「(マルクスが)カール・フォークトと論戦を交えていること、および、エンゲルスは遺稿『自然弁証法』の執筆に着手した動機の一つが俗流唯物論との対決という問題意識に存したということ、この事実を想起しておけば足ると思う。マルクス・エンゲルスは、俗流唯物論を孫引的知識で侮辱したのではなく、その所説内容と真摯に対決している。」209P

一　ヘーゲル左派内論争から自然と人間の二分法批判

「マルクスは、学位論文『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』(一八四一年)から

も知られるように、自然の問題に並々ならぬ関心を懐いていた。エンゲルスも亦、修学時代このかた、或る意味ではマルクス以上に、自然科学に興味を寄せていた。／ここでは、しかし、両人の軌跡を初期から跡づけることは割愛して、両人の最初の共著『聖家族』(一八四五年)の次の一文に留目するところから始めよう。」209P

『聖家族』からの引用「ヘーゲル哲学のうちには三つの要素がある。第一にスピノザの実体、第二にフィヒテの自己意識、第三に両者の……ヘーゲル式の統一物、絶対精神である。第一の要素は人間から切り離して形而上学的に改作された自然であり、第二のものは自然から切り離して形而上学的に改作された精神であり、第三のものは、これら両者の形而上学的に改作された統一であり、現実の人間、現実の人類である」209P

「マルクス・エンゲルスは、自らの哲学的営為と立場を位置づけるべく、ヘーゲル左派の展開過程、すなわち、D・シュトラウス、B・バウアー、L・フォイエルバッハという展開において、ヘーゲルにおける自然と精神との「形而上学的に改作された統一」が一旦解体された新たな統一へともたらされた次第を述べる。」209P

『聖家族』からの引用「シュトラウスはスピノザの立場から、バウアーはフィヒテの立場から、ヘーゲルをそれぞれ神学の領分で首尾一貫して展開した。……フォイエルバッハが現われるに及んで、彼は形而上学的な絶対精神を“自然という基礎のうえに立つ現実的人間”に解消することによって、はじめてヘーゲルをヘーゲルの立場に立って完成し、批判した」・・・・・・「唯心論と唯物論の旧来の対立が、全面的に戦いつくされ、フォイエルバッハによって最終的に克服された」209-10P

「この時点のマルクス・エンゲルスは、フォイエルバッハをこのように位置づけ、その立場を執ろうとしていたかぎりで、「観念論とも唯物論とも異っており、しかも同時に、両者を統一する真理」(マルクス『経哲手稿』一八四四)、「観念論と実在論との対立を止揚する立場」(エンゲルス『カーライル論』一八四四)を標榜していた。翌年になると、しかし、彼らはいちはやくフォイエルバッハを超克する見地に達し、固有の唯物論を構築するに至るが、その差異にも、人間と自然との即自対自的な統一というモチーフは維持されている。」210P

マルクス・エンゲルスからの十八世紀の唯物論、哲学における二分法的対置の引用の文を承けて「ヘーゲル左派の場合、このモチーフは、物質と精神、自然と人間との二元論的截断の構図を前提とする“近代知の地平”を超克しようという自覚的な志向に支えられており、睥睨*(へいげい)*すべからざるものを秘めているように思う。」210-1P

「今世紀に入って、近代哲学の地平そのものが批判的に討究されるようになった砌*(「みぎり」のルビ)*、「我と汝」「我と其」との統一的把握を問題にするマルティン・ブーバーや「共同世界*(「ミットヴェルト」のルビ)*」「環境世界*(「ウムヴェルト」のルビ)*」「人間」の統一的編制を問題にするカール・レーヴィットが、フォイエルバッハの先駆的業績を高く評価したのは決して謂われなしとしないのであって、フォイエルバッハの「我—汝」論は「従来の哲学一般の止揚」という課題意識に裏打ちされていた。」211P

「「近世哲学の感性はヘーゲル哲学である。それ故——とフォイエルバッハは言う——新しい哲学の歴史的必然性と正当性は主としてヘーゲル批判に結びつく」。フォイエルバッハは「デカルト哲学の端初、すなわち感性と物質の捨象が、近世思弁哲学の端初である」こと

を摑むと同時に、その完成態としてヘーゲル哲学を位置づけ、この近世哲学のそのものの超克というモチーフをいちはやく抱懐していたのである。この点では、バウアーも同様であった。」*(文献提示略)*211P

「マルクス・エンゲルスは、自然と人間との真の統一という課題意識をヘーゲル左派の先輩、フォイエルバッハやバウアーから継承しつつ、固有の理論形成によってそれに応え、新しい自然観・人間観、ひいては新しい世界観の地平を拓く所以となった。われわれはそのラフ・スケッチを第二の共著『ドイツ・イデオロギー』(一八四五～四六年)のうちに読む。」211-2P

『ドイツ・イデオロギー』からのフォイエルバッハ批判の文を承けて「ここで立言されているのは、決して単に、いわゆる自然界といえども人間の営為によって変様された所産だということではない、「歴史においてはどの段階にあっても、或る物質的な成果、生産諸力の一総体、歴史的に創造された対自然ならびに個人相互間の一関係が見出される。これは各世代に先行世代から伝授されるものであるが、このものはなるほど一面では新しい世代によって変様されるとはいえ、他面では当の世代に対してそれ固有の生活諸条件を指定し、この世代に一定の発展、或る特殊な性格を賦与しもするということ、こうして人間が環況を作るのと同様、環況が人間を作るわけである」ということ、人間存在の斯くの如き「歴史的」な在り方に視座を据えて、マルクス・エンゲルスは世界を把え返す。」212-3P

「この“歴史・内・存在”というべき在り方にあっては、自然的与件に対する人間の関係は、第一次的には、対象的認識というテオレーティッシュ*(theoretisch:理論的)*な関係ではなく、物質的生活の関心に根差したプラグマティッシュ*(実用的な)*・プラグティッシュ*(実践的)*な関与であり、そこではまた、汝をはじめ他者との関係は、第一次的には他我としての認知といったスタティックな Anerkennung*(認知)*ではなく、物質的生活の場での分業的協働という役割的に編制されたペルソナ的な関係である。――この対自然的かつ間個体的な関係行為 Verhalten-Verhältnis は、即自的には動物においてすら存立するにしても、「動物にとっては他のものと関わる彼の関係は関係としては存在しない」「動物は対自的には何ものとも“関係”せず、そもそも関係しない」のであって、当の対自然的間主体的な関係が対自的に存在するのは人間においてのみである。――唯物史観が、「上部構造」としていわゆる精神文化的次元を視野に配視しつつも、さしあたり、物質的な生産と交通の場面に基礎的視座を構えるというのは、人間の対自然的かつ間主体的な関係の基底を如上の視角で観ずることの謂いにほかならない。」213P

「マルクス・エンゲルスは、この視座に構えを執ることによって、先行哲学においては初めから抽象態で論件とされていた対自然的関係ならびに間*(「かん」のルビ)*人間的関係を現実的・具体的(con-cret＝共に・互いに、konkret*(具体的な)*＝zusammengewachsen)な相で見据え、人間と自然とを二元的に截断することなく、まさしく Gliederung 動態的な編制の構造に即して把え返す次第なのである。*(註)*」213-4P

「爰において、デカルトこのかたの物質と精神との二元的分離、自然と人間との二元的截断を止揚しつつ、世界編制の分肢的一契機としてあらためて対象化されうるかぎりでの環境世界的 umweltlich な「自然」について、存在論的にも認識論的にも、新しい了解の地平が開かれ、“新しい自然観”の構築が提示されうることになった。」214P

(註)　「本文中で一端を引用したマルクス・エンゲルスの章句からしても彼らが世界・内。存在を極めて具体的な相で把えようとしていること、そして生産活動という場での実践的な Bezug *(関連づけ)*に存在論的な意義を措いていることが彰らかであると念う。」214P

二　"自然の歴史化"と"歴史の自然化"　――生産に留意するマルクス・エンゲルスの自然観

「マルクスおよびエンゲルスの自然像を問題にする前に、"自然の歴史化"そしてまた"歴史の自然化"という了解の姿勢を一瞥しておかねばならない。」215P

「現実の感性的自然界は「産業と社会状態の産物であり、……しかもそれが歴史的な生産物であるという意味で、諸世代の全系列の活動の成果*(「レズルタート」のルビ)*なのである。……この活動、次々と進展する感性的な労働と創造*(「シャッフェン」のルビ)*、この生産こそが現に実存している全感性界の基礎*(「グルントラーゲ」のルビ)*なのである。……しかも、この際、外的自然の先在性*(「プリオリテート」のルビ)*は残るし、史上はじめて登場した最初の人間には当て嵌まらない。がしかし、こういう区別だては、人間と自然とを区々別々のものとして考察するかぎりででしか意味をなさず、人間の歴史に先行するこの自然なるものは、……最近誕生したばかりの二、三のオーストラリア沖珊瑚礁島の上ならいざしらず、もはやどこにも存在しない代物である。」215P *これを*「"一時的筆の走り"*(註)*」215P *として批判するむきがあるけれど、この『ドイツ・イデオロギー』の中の有名な提題が*「マルクス主義の論理構制にとって重大な意義を担っていること」215P *を指摘しています。そのことは後期のエンゲルスの文を引用して、それと繋がっている旨を書いています。*

「茲で、人はハイデッガー『ヒューマニズム書簡』の或る条りを連想するかもしれない。「唯物論の本質は、一切が物質にすぎないという主張にあるのではなく、むしろ一切の存在者が労働の素材 Material として現われるという形而上学的な規定にある」云々。――初期のマルクスは、慥かに『経済学・哲学手稿』のなかで「自然すなわち感性的外界は、労働がそこにおいて実現される素材 Stoff である」という言い方をしているが、しかし、この時点でも「自然は人間の非有機的身体 der unorganische Leio des Menschen である」と彼は考えており、「対象的世界の実践的な産出、非有機的自然の加工こそが、人間が意識的な類的存在としての実を示すことである。……動物は自分自身を生産するだけであるが、<u>人間は全自然を再生産する</u>」と論じている。マルクスにあっては、自然は主体にとって外在的な単なる労働の素材ではない。彼は、初期においてすら、人間と自然との統一性を、人間の非有機的身体としての自然という即自対自的 an und für sich な相で問題にしているのであって、ハイデッガーの理解は所詮失当である。」217P *(文献の提示は略)*

「われわれは、「自然」といえども歴史的現実態においては既に"人為"であるという前掲の提題や、自然を以って人間の非有機的身体と規定する発想(因みに、マルクスは後年の『経済学批判要綱』においても、労働の非有機的主体ないし非有機的諸条件としての自然を云々している)、これが自然界なるものを地表的規模でしか勘案していないかどうかは後段に委ね、マルクス・エンゲルスとしては、まずは「自然界」を人類の歴史的生活との即自対自的な統一の相で把えようとしているということ、この Grundverfassung*(基本的な構え・構制)*を如上からあらためて念頭に納めねばなるまい。この際、謂うところの統一の媒介環が前項でみておいた通り、かの物質的生活の生産の場、対自然的。間主体的な実践的協働の

場にほかならない。」217-8P
「是に徹するとき、即自的に存在する自然物そのもの、物自体に関わる“悪名高き”エンゲルスの提題をも諒解することができる。彼は、ヘーゲルによるカントの「物自体」に呈する批判を顧慮したうえで、――周知の通り、それは「あらゆる対他的存在からの抽象(＝あらゆる対他的存在の捨象)」eine Abstraktion von Für-anders-sein という成句に象徴される。エンゲルスとしても、カントの「物自体」が homo noumenon *(本体的人間)* に関わることを承知していたが、さしあたっては自然物に関して――次のように立論する。／「この見解を反駁するうえで決定的に重要なことは、観念論の立場から可能なかぎりでは、すでにヘーゲルが立言している。フォイエルバッハがこれにつけくわえた唯物論的な論点は、深遠というよりむしろ才気に富んだものである」。「こういう哲学的妄想に対する最も適切な反駁は、実践、すなわち、実験と産業とである。われわれが或る自然的現象を自分自身でつくり、これをその諸条件から発生させることができれば、カントの不可認識的な“物自体”はおしまいである。動植物の体内でつくられるもろもろの化学的物質(例えば色素アリザリン)は、有機化学がそれをつくり出すようになるまでは、そういう“物自体”であった。有機化学がそれをつくり出すようになって、この“物自体”は Ding für uns になった」云々。／この議論がカントの物自体に対する認識論的批判としてどこまで妥当するか、これには異見の余地がありうるであろうし、人工的に創出できるようになれば Ding für sich が Ding für uns に転ずるという論点は、エンゲルス自身、認識論的にはこれで完結すると考えていたわけではあるまい。彼は「物質そのもの als solches というのは純粋な思惟の創造物であり、純粋な抽象である。……物質そのものは感性的に実存するものではない。自然科学が単元的物質そのものを探求すべく志すとき……自然科学の企図していることは、サクランボやリンゴの代りに、果物そのもの……を見出そうと努めるのと同断である」と考えており、彼としては、このように「物質そのもの」は実存せずと言い、あくまで Ding für uns に定位しようとする。この際、「われわれにとっての事物」というのは、しかし、単なる「認識された事物」という次元においてではなく、人間の歴史的実践(基底的にはほかの「生産活動」)によって開示された Da-nnd Sosein の謂いであつて、開示というのは、しかも、即物的な対象的創出ないし変成そのことの謂いではなく、an und für sich werden＝bei sich sein の現成である。」218-9P
「この故に、歴史的に現成した自然というのは“地表的な環境世界に局限されるのではないか”との疑念は卻けられるのであって、人間が間主体的な協働的対象的活動 zusammenwirkende gegenständliche Tätigkeit において“内・存在”する「自然」は、それが歴史的に開示されるかぎり、いわゆる大宇宙的な規模に及びうる次第である。(拙著『世界の共同主観的存在構造』第一部第三章、参照)。」219-20P
「マルクス・エンゲルスは、いわゆる社会的・文化的な形象が物象化 versachlichen されて現前するかぎりで、自然の歴史化と併せて歴史の自然化をも問題にしていくのであるが、総じてこの世界はハイデッガー流の Zuhandensein でこそなかれ、歴史的に被媒介的な共同的生世界 Mit-lebenswelt である。マルクス・エンゲルスは、原基的には、このような相で「自然」を観ずる。」220P
(註) *「“一時的筆の走り”」との東ドイツのザイデルの批判は、ロシアマルクス主義批判に*

おいて実は重要な意味をもっていると廣松さんは押さえつつ、「われわれはザイデルの所論に批判点を保留するものですが、本稿での拙論が決して突飛な解釈ではないこと――“ロシア・マルクス主義”のフィルターを返上してマルクス・エンゲルスの文典を忠実に繙読するかぎり、それは当然浮かび上がるゲシュタルトであること――これを傍証する一具として、敢て長文を東独の論稿から援用した次第である。」221P *とまとめています。*

三　*エンゲルスの(弁証法的)自然像*

「マルクス・エンゲルスは、彼らの自然像を体系的な形では書き遺していない。エンゲルスは“自然弁証法”の体系的講述を期して二十年歳月を費やしたのであったが、それは遂に完成されるところがなかった。とはいえ、われわれは、彼らの“覚書”や遺稿をもとにして、一応の点画を描くことはできるし、彼らの趣意を汲みつつ継承的に展開することもあながち不可能ではない。」222P

「この際、主要な文典となるのは、一八七六年から翌年にかけて執筆された連載論文『反デューリング』の自然哲学関係の諸章、および、一八七三年から一八八六年の十余年間にわたって書き綴られた遺稿『自然弁証法』である。ところで、前者は合本の形でエンゲルスの生前に版を重ねたとはいえ、「この書物は論争の書であるから、論的が訂正できないときには、私のほうでも何一つ訂正しないことが義務」である(第二版への序文)という信義から、当該の諸章は改訂されていない。しかし、そこに盛られている有名な「弁証法の三法則」をはじめ幾つかの重要な提題について、エンゲルス本人の考えには或る種の変化が生じた形跡がある。この故に、この論争の書の諸命題を以ってエンゲルスの最終的な思想と速断することは許されない。茲で、クローズアップされるのが遺稿『自然弁証法』のうち『反デューリング』以後に執筆された部分である。ところが、この遺稿は元来一連のものではなく、旧層と新層とのあいだには、構案はもとより思想的準位にも著しい相違が認められる。遺憾なことには、しかし、スターリン時代に編輯し直された形を踏襲している現代版は、手稿における新旧層の別を無視するかたちで、覚書の部分を強引に再構成し、“体系化”する方式を採っており、文献学的にみて甚だプロブレマーティッシュである。という次第で、周到に論考するためには、遺稿『自然弁証法』のテキスト・クリティークが先決要求になる。幸い、そのための基礎資料は既に与えられており、遠からず我が邦で“原状恢復版”が作成される筈であるが、ここではGrundverfassung*(基本的な構え・構制)*を辺縁から截り出しておけば足るであろう。」222-3P

「エンゲルスは――この点ではマルクスも勿論同様であるが――一言でいえば、機械論的な唯物論の自然像に対して「弁証法的」な自然観を対置する。素材的知識内容に関するかぎり、彼らが十九世紀中葉の自然科学の埒を出なかったことは言うまでもないが、エンゲルスとしては自然諸科学の展相のうちに「機械論から弁証法へ」の傾動を読み取る。すなわち、自然諸科学そのものが研究の深化に迫られて、機械論的な概念構成を止揚しつつ、弁証法を即自的*(「アン・ジッヒ」のルビ)*に受け容れる方向に動いていることを看取・指摘する。彼はこのような文脈で自然科学の知見にあらわれた自然の弁証法的構造を例証的に取出してみせる。が、われわれとしては、まずは「機械論的 対 弁証法的」という対比の視軸のうちに彼の自然像の基本的構制を索*(「もと」のルビ)*めることができる。」223P

「機械論的な自然観を批判し、弁証法を対置するにあたって、エンゲルスがヘーゲルの先

蹤を承けていることは言を俟たない。しかし、事はヘーゲルの自然哲学を唯物論的に転倒すれば済むという底のものではない。十九世紀の後半ともなれば、ヘーゲル哲学体系のうちでもとりわけ“弱い環”とみなされていた自然哲学は素材的にも旧すぎたし、他面ではまた、俗流的唯物論者たちがヘーゲル弁証法そのものに向けていた批判にも応接する必要があった。エンゲルスにとっては、自然科学的唯物論を借りてヘーゲルの観念論を批判し、ヘーゲルの弁証法を借りて自然科学の機械論を批判する、といつた操作で済むべくもなかった。彼としては、当時の自然諸科学を内在的に研究しつつ、自然科学が即自的に前提している哲学的世界観と概念構成とを批判し、そこことを通じて、独自の科学論的体系を構築する作業、ひいては独自の自然像を体系的に描出する作業を自らに課した所以である。この体系化の事業は、未完に終ったというよりも、むしろ、挫折を余儀なくされたのであったが、自然諸科学の機械論的な世界了解にたいする批判の視角と論点はかなり鮮明な形で書き遺されている。」223-4P

「エンゲルスは、機械論をもその一部とする如き非弁証法的な思考方法を、ヘーゲルの語法を踏んで「形而上学的」と指称するのであるが、彼は例えば次のように書く。」224P *として機械論切り出しの部分の批判を掲載して、廣松さんはコメントします。*「エンゲルスは、経験論的実証主義にも批判を向けるがさしあたっての問題は「自然科学がイギリス経験論から受け継いだそれ特有の偏狭な思考方法」「十七世紀、十八世紀の形而上学――イギリスではベーコンとロック、ドイツではヴォルフ」この「形而上学的」な世界観思惟様式の排却に懸る。」225P*(文献の提示は略)として、その「形而上学」批判のエンゲルスの論攷――二項対立的図式、否定か肯定かの単純化、因果論的なとらえ方などなどの批判を――を引用しています。*

「ここにおいて弁証法が対置される次第であるが、右に引用した範囲だけでも、エンゲルス自身の存在観が間接に泛かぶ筈である。彼は、万象を共時論的には相互浸透の相で、通時論的には生成流転の相で観ずる。これは、もとより、古代的な自然観への単純な復帰ではありえな。彼としては、近代科学流の存在観、すなわち、実体的に固定化された諸事物という不易的な諸成素の機械論的な複合として自然界を把える観方を批判しているのであって、彼によれば、自然界は「諸事物の複合ではなく諸過程の複合」なのであり、自然は「在るのではなく成るのである」。」225-6P*(文献の提示は略)*

「「近代の理論的自然科学に狭隘な形而上学的な性格を与えたのは、排中的な両極的対立、固定化された区劃、固定的な類別」といった概念構成である。「こういった対立や区別は、しかし、相対的な妥当性しかもたず、むしろ、そういった対立や区別がもっていると考えられている不動性や絶対的妥当性は、われわれの反省によってはじめて自然のなかにもちこまれたものなのだという認識、この認識こそ弁証法的自然観の核心をなすものなのである」――この一文にもみられるようにエンゲルスは決して単純な模写説を採っているのではなく、彼としては科学が客観的対象の実相の模写的概念化であるところの概念構成は、その実「われわれ認識する側の反省によって自然のうちにもちこまれたもの」であることを指摘し、弁証法的な存在了解を代置していく。」226P*(文献の提示は略)*

「爰に提示されるエンゲルスの自然像は、空間・時間・物質を絶対的な存在として自存化させることになく、運動的物質ないし物質的運動という統一態を以って原基(「アルケー」

*のルビ)*的存在者とみなし、原因—結果という連鎖の構図に代えて、相互作用というカテゴリーを基幹に据え、決定論的な法則観を卻けて、新しい法則概念に依って展相を把え返していることをはじめ——もはや祖述の紙幅を欠くので、拙著『マルクス主義の地平』『マルクス主義の理路』の当該個所を参看ねがえれば幸甚であるが、——、トルソーではあれ、陸離たるものがある。」226-7P

「筆者は、固*(「もと」のルビ)*より、マルクス・エンゲルスの所説を無批判的・無条件的に拳々服膺*(「けんけんふくよう」のルビ)*するものではない。況んや、相対性理論や量子力学がもたらしたごとき今世紀の知見をエンゲルスが先取していたなどと強弁する意趣はない。しかし、彼が近代科学的自然像に対置した弁証法的自然観の構制は、近代科学的概念構制の隘路*(「あいろ」のルビ)*が露*(「あら」のルビ)*わになっている今日、その全容を補全的に再構成してみるに値すると思う。」227P

「この作業は、しかし、“協働的に歴史化された自然、そして間主観的に自然化された歴史”という了解の存在論的・認識論的な討究と併せて、然るべき別稿に委ね、ここではとりあえず、“俗流マルクス主義的”既成観念の震盪*(「しんとう」のルビ)*を試みつつ論件の所在を確認したところで“緒論”というよりも Vorbemerkungen*(緒言)*の筆を納めねばならない。」227P

V　マルクスにおける哲学

この論攷は、元々講演として行われた原稿を元にしていて、「節」も「項」も小見出しもついていません。蛇足として批判されることを承知で、「学習ノート」と開き直って、段落毎に斜体太文字で小見出しを付けます。

第一段落——講演の内容—序　230-1P

「本日は「マルクスにとって“哲学”とは何であったか」というタイトルで卑見を申し述べることになっておりますが、勿論、「哲学」の定義が問題なのではありません。マルクス主義の思想的な構えそのものを謂うなればメタ・レベルにおいて自覚的に把え返すこと、これが課題であります。」230P

「私は以前から、マルクス主義は元来、近代イデオロギーの地平を超えるものであることを力説し、その見地からいわゆるロシア・マルクス主義流の“科学的マルクス主義”を批判すると同時に、いわゆる西欧マルクス主義流の“人間主義的マルクス主義”も批判して参りました。けだし、科学主義的な Objektivismus *(客観主義)*も、人間主義的な Subjektivismus *(主観主義)*も、まさに近代イデオロギーの地平に立つものであり、subjektivismus と objektivismus とは近代哲学の地平における相補的な両極形態に他ならないからであります。」230P

「マルクス本来の思想的原理という次元にになれば、今日の歴史段階においては、まだ、そう簡単に、“旧くなった”とか、“乗り越えの対象になった”とか、安直に言えるような状況にはないと思うのであります。」231P

「前置きが長くなりましたけれども、本日は私がこのように了解する所以のものを、マルクスの思想的構えが直截に顕れている筈の、彼の“哲学”の次元に即して、申し述べてみたいと念います。／マルクス哲学の構え、と申しますと、気の早い人びとは、弁証法とか、唯物論とかいって、それで済ませようとするかもしれません。だか、本日の話は、

Grundverfassung *(基本的な構え・構制)* と申しましょうか、もっと根底的な構えであります。」231P

第二段落――哲学と経済学双方の止揚 232-4P

「哲学者のなかには、アリストテレスとか、ヘーゲルとか、或いは亦フッサールとかのようにそもそも哲学とはなんぞやということを主題的に論じている人もありますが、マルクスの場合、残念ながら、哲学とは何かということについて正面から論じておりません。しかし、マルクスの文献をお読みになっている諸君は、ここで『ヘーゲル法哲学批判序説』における有名な言葉を連想されることでありましょう。／「人間解放の頭脳 Kopf は哲学であり、人間解放の心臓 Herz はプロレタリアートである」という言葉がそれであります。マルクスは、この言葉に続けて、「哲学はプロレタリアートを止揚(アウフヘーベン)することなくしては自己を実現することができず、プロレタリアートは哲学を実現することなくしては自己をアウフヘーベンすることができない」と書いております。／これを以ってみれば、マルクスは哲学の自己実現とプロレタリアートの自己止揚とが相即一致すると考えていたことが判ります。この言い方だけではいかにも抽象的でありますけれども、この結論に先立つ個所で、マルクスは次のような議論を展開している。それは一方における実践派、つまり哲学などには背をむけて、もっぱら「哲学の否定」Negation Philosophie を主張する一派、そしてもう一方における哲学派、つまり、現状に対する哲学的批判をもっぱらとする流派、これら両派に対する両刀批判であります。これら両派に対するマルクスの批判は、まず前者に関して申せば、哲学を否定しようとしても、「哲学を実現することなくしては哲学をアウフヘーベンすることはできない」ということであり、後者に関して言えばね哲学を実現しようとしても「哲学をアウフヘーベンすることなくしては哲学を実現できない」ということであります。当時におけるマルクスの考えでは、哲学の実現と哲学のアウフヘーベンとを相即的に遂行しなければならないということ、これが主張されているわけであります。」232-3P

「諸君のなかには、マルクスがこの『序説』のなかで、哲学をアウフヘーベンしなければならないと主張していることに格別の注意を払われるむきもあろうかと思います。そして、マルクスはやがて、“哲学者であることをアウフヘーベンして経済学者となった”ということを強調されるむきもあると思います(笑)。だが果たして、単純に“経済学者”になってしまったのか？・・・・・・マルクスが経済学大系と銘打たず、あくまで経済学批判を標榜したという事実、これは銘記に値します。そして、実は、この「批判」という概念が、マルクスの哲学を理解するうえでも、そしてとりわけ、彼の思想的構えを理解するうえで、重要な概念なのであります。」233-4P

第三段落――「批判」という概念とヘーゲル(左派)の哲学の乗り超え 234-7P

「ここで、諸君のうちには、あらためて『ヘーゲル法哲学批判序説』のなかの有名な文章を想い出されるのではないでしょうか？／「批判の武器は武器の批判にとつて代わることはできない。物質的なゲヴァルトは物質的なゲヴァルトによって打倒されなければならない(そうだ！　という声)。だが、しかし、理論も、それが大衆をつかむや否や、物質的なゲヴァルトになる」というマルクスの文章がそれであります。」234P

「「批判」という概念、これは初期以来、マルクスにとって重要な概念の一つであり、実を

申せば、これは初期マルクスに限らず、ヘーゲル学派における重要な概念にほかなりません。マルクスはこの「批判」という概念に固有の内実を与えることにおいて固有の思想的な構えを確立したのだ、と申すことすら許されるほどであります。それでは、「批判」ということにマルクスが与えた固有の内実は何であるのか、そのことが彼の“哲学上”の立場にどのような特性を賦与する所以となっているか、そして、さらに、そのことが彼の「経済学批判」とどう関連するか？　それをみるためにはマルクスがヘーゲル哲学、ひいてはヘーゲル左派の哲学をどう乗り超えたのか、その経緯を顧みておかねばなりません。」

234-5P・・・*弁証法のキー概念としての「批判」*

「「批判」ということを、哲学上の重要な概念として持ち出したのは申すまでもなく『純粋理性批判』をはじめとするカントの三批判書でありますけれど、ヘーゲルにおいても「批判」ということは重要な概念として継承されております。そのことは、ヘーゲルが直接に指導して出していたヘーゲル学派の機関誌の名前が Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik.『学問的批判のための年誌』というタイトルになっていたという一事からもお判りいただけると念います。勿論、同じく「批判」といっても、カントとヘーゲルでは意味内容がすでに代わっておりますし、ヘーゲル左派のブルーノ・バウアー一派などともなればいよいよ、意味内容が変わって参ります。が、マルクスがそれをどう受けとめて、どう錬え直したかをみる前に、まずは「哲学」なるものがヘーゲルその人においてどう自己規定されていたか、この先決問題から先にみて行きましょう。」235P

「ヘーゲルは、幾つかの視角から「哲学」を規定しておりますが、ここでは三つだけにしぼって申します。／第一には、哲学は本当は哲学 Philosophie ではあってはならず、Wissenschaft でなければならないということです。Philo＋sophiea というのは御存知の通り、ギリシャ語で「知」を「愛」する「愛知」という意味であるわけで、ヘーゲルに言わせれば、知を愛するだけでは駄目だ、知を体系的に確立しなければならない。Wissenschaft (つまり体系知)でなければならない、というわけであります。Wissenschaft という言葉は、ラテン語の scientia に相当するゲルマン系の言葉ですが、スキエンティアというのは、近代におけるサイエンスとはニュアンスが違って、内容的にみれば神学的な体系だったわけでして、ヘーゲルのいうヴィッセンシャフトも、単なる体系的な知識ではなく、やはり神学と通底いたします。／第二には、そこで、哲学は内容・対象からいえば宗教と同じものであり、つまり、絶対者＝神を対象とすることです。但し、ヘーゲルによれば、宗教が表象というかたちで神を捉えるのに対して、哲学は概念において絶対者を把握するという点で相違します。要言すれば、哲学は宗教と同じ内容を概念という形式で把握したものである、とヘーゲルは規定します。／第三に、哲学大系は――絶対者の自己啓示・自己展開を追認したものでありますからして――、本質的にいって、未来は包摂しえません。ヘーゲルがミネルヴァの梟、つまり、事の成行きを一切見届けてからようやく飛び立つミネルヴァの梟に哲学をなぞらえた所以でもあります。／この第三の点は、あとの話と多いに関係しますので、ヘーゲル自身の言葉を多少とも引用しておきましょう。――「哲学の課題は、現にあるところのものを概念的に把握することにある。……哲学はその時代を思想というかたちで把えたものである。哲学が現在の世界を超え出たつもりになるとすれば、それは個人が自分の時代を飛び超えようと夢想するのと同様に愚かである。」「世界がどうあるべ

きかを教えることに関してなお一言つけくわえておけば、哲学はどのみち、それを教えるには、到来するのがいつもおそすぎる。哲学は、世界についての思想である以上、現実がその形成過程を完了し、おのれを仕上げ終えた後になってはじめて出現する、云々。」ヘーゲルは、このように申しているのでありまして、要するに、哲学は未来を先取りすることができず、世界が如何にあるべきかを教えることはできない、と言うのであります。」235-7P

第四段落――ヘーゲル左派のヘーゲル批判　237-40P

「このようなヘーゲルの哲学観(哲学というものについてのヘーゲルの見方)に対して、ヘーゲル左派の連中がどのような不満をいだき、どのような方向で批判していったかは、大凡お察しがつくことと思います。・・・・・・マルクスの謂う哲学のアウフヘーベンと関連するかぎりで、二つの事項をここで挙げておきます。／第一に挙げておきたいのは、これはヘーゲル左派のうち、チェシコフスキーやモーゼス・ヘスが主張したことなのですが、実践の哲学、行為の哲学を標榜する動きが登場したということであります。・・・・・・彼らに言わせれば、テオーリアの立場からプラクシス、実践の立場に移行することによってそれが可能だというのであります。・・・・・・彼らは「実践」ということで、一種の社会主義的な実践を考えているのでありまして、・・・・・・彼らは一方では哲学そのもののアウフヘーベンを云々しておりながら、他方では実践に関わるヴィッセンシャフトとして実践の哲学、行為の哲学ということを云々するという聊か奇妙な事態に陥った次第であります。／既にお気付きのことと思いますが、マルクスは哲学そのもののアウフヘーベンという彼らのモチーフを受けつぎながら、彼らの陥っていた一種のジレンマめいたものを打開しようと図ります。・・・・・・／第二に挙げておきたい事項。それは、ヘーゲルが“哲学と宗教とは内容的には同じものだ”と考えていたことに関係するのですが、これに対してフォイエルバッハやブルーノ・バウアーは、彼らの宗教批判と同時相即的にヘーゲル哲学を批判する所以となりました。ヘーゲルにおいては、哲学とは絶対精神＝神の自己展開を観望的に記述したものとされておりましたところ、神とはそのじつ人間である、絶対精神とはじつは人間の自己意識にほかならない、という具合にフォイエルバッハやバウアーは把え返しました。そこでバウアーの場合で申せば、ヘーゲルが絶対精神の自己展開過程ということで提示してみせたものは人間の自己意識の歴史的な自己実現過程にほかならない、ということになります。そしてこの自己意識の自己実現ということが、バウアーの謂う「批判」という概念と密接不可分なのであります。／バウアーの「批判的批判」という概念が換骨奪胎されてマルクスの「批判」という概念に行きつくという事情がありますので、ここで若干のコメントを挿んでおきましょう。／ブルーノ・バウアーは、ヘーゲル哲学をフィヒテ哲学に近い線で改釈した、という言い方がしばしばなされますが、それというのもヘーゲルの謂う絶対精神を自己意識ということで把え返し、この自己意識の実践的な自己定立ということで押し通そうするからでありましょう。ところで、自己意識の展開といっても、一切が自覚的な過程というわけではない。ヘーゲル式にいえば即自的な展開過程もあり、それが或る種の局面で対自的・自覚的な過程になるわけであります。が、基本的にいって、この歴史的な進展を促進するもの、それがバウアーのいう「批判」なのであります。存在論的な次元でいえば、バウアーの場合、「批判」とは自己意識の歴史的な自己実現、自己展開の動力をなすものにほかなりません。そして、批判が批判である所以のものは、

それが自覚的・意識的な営みであることに存するわけでして、バウアーによれば、自己意識の運動たる批判においては、考察する主観の側と考察される側とかそこにおいて一体的に統一される。主観と客観との統一という課題、これがバウアーにおいては「批判」という在り方で実現されることになっている。しかも、この批判は、即自的な事態の対自的な把え返しであり、しかも、その自覚的把え返しというのは即自的な事態の単なる追認ではなく、批判的な再措定でありますから、認識批判の構造に即してみれば一種のイデオロギー批判に通じるような批判的分析でもあります。では、――このような「批判」ということと、実践ということをバウアーはどう結びつけたのか？　バウアーの有名な言葉に「純正理論のテロリズム」Terrorismus　der wahren Theorie という言葉がありますけれど、彼はこの点ではいかにも観念論的なところがありまして、哲学的批判こそが優れて実践的であるという見地を保持します。／マルクスとしてはヘーゲル左派の先輩連中がヘーゲル御大の哲学を内在的に乗り超えようとして提出した二つの路線、すなわち、一方におけるヘス式の「行為の哲学」、他方におけるバウアー式の「批判の哲学」これら二つの路線をさしあたりヘーゲル法哲学の内在的批判ということを軸にして一種独特の仕方でアウフヘーベンしつつ、固有の構えを設定したのであります。」234-40P

第五段落――「批判」ということのとらえ返し　240-3P

「このように、ヘーゲル左派の内部に生じた二つの路線ということを紹介しますと、諸君はおそらく、マルクスがあの『ヘーゲル法哲学批判序説』でおこなっている両刀批判、すなわち、一方における哲学におけるネガチオン、哲学のアウフヘーベンを主張する実践派、そして他方における哲学の実現、哲学のフエアヴィルクリッヒュングを主張する批判派、これらの二つの流派に対する両刀批判を、ここでもう一度想い出されることと思います。・・・「もう少し幅広い範囲を念頭においたもの」・・・しかし、マルクスがヘーゲル左派内部における二つの流派のことを考慮に入れていることはまずもって慥かでありますし、彼の両刀批判がヘーゲル左派内部の二派に対して尤もストレートに妥当することは間違いありません。」240-1P

「先にみておきましたように、マルクスとしては、「批判の武器は武器の批判にとって代わることはできない、物質的なゲヴァルトは物質的なゲヴァルトによって打倒されねばならない。だかしかし、理論もそれを大衆をつかむや否や、物質的な力*(「ゲヴァルト」のルビ)*になる」と言います。彼はプロレタリアートの革命的<u>実践</u>と、哲学における理論的<u>批判</u>とを相互媒介的に結びつけることによって、哲学のアウフヘーベンという一方の要求と、哲学の実現という他方の要求とをしかるべく統一したのでした。尤も、当時におけるマルクスのこの言い方で問題が最終的に解決したのかどうか、そう簡単には言い切れません。少なくとも、理論的に整備すべき点や、具体化すべき点が残っていたことは明らかであります。」241P

「翻って考えますに、マルクスは学位論文『デモクリトスとエピクロスとの自然哲学の差異』のなかで、ブルーノ・バウアーの強い影響のもとに次のように書いておりました。／「哲学の実践はそれ自身理論的である。ここの実存をその本質において、あれこれの特殊な現実を<u>理念</u>において量ること、これが批判である。」マルクスとしては『ライン新聞』時代においても、少なくとも初期にあっては、やはり、こういうバウアーに近い立場から、「経

験の審判に惑わされることなく……事物の現存在に対して、内部理念の本質という尺度を当てがう」という仕方で「批判」を展開しておりました。」241P
「批判の基準たるべき理念は、現状の単なる追認によって得られるものではなく、現状から相対的に独立なものではならないにしても、しかし、現状から全く超絶したものではあるべくもありません。その点では、ヘーゲルが、哲学はその時代を超えることはできないと言い、哲学が世界に対してかくあるべしと教えうるには哲学の到来はいつも遅すぎる、と言っているのは非常に重い言葉であります。世界はかく在るべしと叫んだところで実際的な効力がないというのではなく、かくあるべしという理想・理念ないしはまた当為なるものが、ヘーゲルに言わせれば既に現実の追認という埒を出ないというのであります。勿論現実の追認といっても、経験的現実をそのまま追認したものではない。理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である、というかぎりで、現実的＝即理性的ということになりましょうか。」242P
「マルクスとしては、しかし、『ライン新聞』の時代までは、大体このヘーゲルの線で了解していた様子がみられますけれども、もはやそういう抽象的な言い方で済ませるわけにはいかない場面に立たされているに至りました。ここにおいて、批判の基準たる理念がどこから得られるのか。そのようにして得られる理念をどのようにして権利づけることができるのか、これを具体的に定立することが、今や要求されるに至っております。」242-3P
第六段落――「批判」のなかみとしての共産主義運動へのアナガージュ　243-6P
「マルクスとしては、この大きな問題を、歴史の現実的な趨勢ということに定位して解決する方向に向かいます。このさい、歴史の発展方向なるものを、ヘーゲルのように「自由」という理念の実現過程と把える域に止まったとしたら、せいぜい一種の“理念史観”にしかならなかったでありましょう。また、彼がもし“批判的批判”が歴史の動力だと考える域に止まったとしたら、歴史の原理を自己意識に観念論的な史観に陥ったことでありましょう。がしかし、マルクスは歴史の現実的な展開の動力、歴史の法則性を、そういうヘーゲル学派的な枠組みを超えて、別の方向に見出すに到りました。」243P
「『ドイツ・イデオロギー』のなかで、マルクスは「共産主義というのは、創りだされるべき一つの状態ではない、それに則って現実が正されるべき一つの理想ではない。僕らが共産主義と呼ぶのは、現実的な運動、現在の状態をアウフヘーベンする現実的な運動である」と書き、「共産党宣言」のなかで次のように書いております。／「共産主義者は、理論的には、プロレタリア運動の諸条件、その進路、その一般的結果を理解している点で、残りのプロレタリア大衆よりも(意識・経験のうえでは)先んじている。」がしかし、実践の場では「共産主義者は特別の原理を掲げて、プロレタリア運動をその型にはめようとするものではない、云々」。――ここには、あくまで、現実のプロレタリア運動にアンガージュしようという姿勢が貫かれていることが容易に認められると思います。」243-4P
「只今『ドイツ・イデオロギー』および『共産党宣言』から引用した命題に関しては、その当時からマルクスとエンゲルスのあいだに聊か見解の相違があったと目されますし、それは措くとしましても、その後マルクスが共産主義社会論・共産主義運動論さらには共産主義運動の組織論を確立していくにつれて、これらの命題がもはやそのままの形では維持されなくなる。そういう意味で、これはマルクスの最終的な考えであるとは言えません。」

244P
「マルクスは、ヘーゲル左派の内部に生じた、哲学のアウフヘーベンを志向する実践派と、哲学の実現を志向する批判派との二つの流派が、ヘーゲルのそれを乗り超えようとして提起した“哲学観”ないし“哲学論”を批判的に受け留めながら、さしずめ、共産主義運動というプロレタリアートの実践的批判＝批判的実践に定位して、哲学の止揚的実現＝実現的止揚という構えを基礎づけたと申せます。／この言い方は、しかし、第三者的にみての話であって、マルクス本人が『ヘーゲル法哲学批判序説』以後の時点でこのことをどこまで強く意識していたかは審らかでありません。哲学のアウフヘーベンというマルクスのモチーフは、『ヘーゲル法哲学批判序説』の一年後に出た『聖家族』などに即してみるとき、もっと射程の大きいものであったと思われます。」245P
「彼らはあくまでヘーゲル学派なのでありますから、ヘーゲルの積極面は受け継ごうと努力している。この点では、マルクスも同様であります。／では、マルクスは、ヘーゲル哲学のどのような点を積極的に継承しようとしたのか、そして、その批判的継承が固有の新しい次元を拓き得た所以のものは奈辺に存するのか？」245-6P
第七段落――ヘーゲルの継承とその批判の切り拓いたもの　246-9P
「ヘーゲルは、マルクスが『聖家族』のなかで指摘しておりますように、スピノザ流の実体主義とフィヒテ流の主体主義とを一種独特の仕方で統一したと申せます。」246P
「若き日のヘーゲルは、いちはやく「デカルト哲学は、わが北西ヨーロッパの近代文化のうちに現われた普遍的で包括的な二元論を哲学の形式で表現したものであった」と述べ、このデカルト流の近代的二元論のアウフヘーベンということを追求しました。・・・・・そして彼の絶対的観念論というグロテスクな形においてではありますけれども、彼自身の言葉でいえば、「独断論的な観念論」と「唯物論的な独断論」との両方をアウフヘーベンしたつもりだったのであります。」246P
「ヘーゲル学派の論者たちは、まず例外なく、ヘーゲル哲学のこのモチーフ、とりわけ主観性と客観性との二元的対立のアウフヘーベンというモチーフを継承します。若き日のマルクスも勿論その例外ではありませんでした。ヘスの行為の哲学もしかりであり、バウアーの批判の哲学も、「批判とは考察される対象と考察する主観との統一である」という先に紹介した言葉からも明らかなように、まさしくこのモチーフを継承しております。／問題は、しかし、主観と客観との統一ということをいくら叫んでも、それが哲学という理論のかたちにとどまるかぎり、所詮は主観性の枠内での主客統一という域を出ないというところにあります。そこで、実践・行為ということが持出され、実践の場における主観性と客観性との統一ということが提起されました。これは確かに注目に値する議論です。だが、一口に「実践」と言い「行為」と言っても、そこにはいろいろな次元が存在します。では、主観と客観、人間と自然、これを真に統一するような実践とはいかなる次元での実践であるのか？　この問題設定に対するマルクス・エンゲルスの回答、それが「生産活動」とりわけ、物質的生産という活動、――今や単なる革命運動という政治的実践より根底的な――この次元での実践という命題になるわけであります。」246-7P
「ところで、しかし、生産という場面における主観と客観、主体と客体との統一、人間と自然との統一、と言っても、人がもし、一方における主体としての人間、他方における客

体としての自然なるものを、実体主義的な発想で二元的に措定したままにとどまるとしたら、生産の場における“統一”と称しても、それはたかだか両極に立つ二つの実体の相互作用的な接合という域に止まってしまうでありましょう。両者の真の弁証法的統一が成立するためには、一方における人間、他方における自然、これら両者のそれぞれに関する存在論的な了解を抜本的に改める必要があります。そこでは、主体と外部的な環境という発想ではなく、それの分節において主体という項と環境という項とが第二次的に形成されるような力動的な場を措定することが要件になります。」247-8P

「今日われわれはこのような力動的な場、そこにおける主体と環境との第二次的な分節というとき、直ちに生態系(エコシステム)を連想し、生態学(エコロジー)を想い泛かべます。因みに、エコロギーという言葉がヘッケルによって創られたのは、『資本論』が出版された前後の時点でありまして、マルクス・エンゲルスが唯物史観を確立した当時にはまだエコロギーという言葉は存在しませんでした。ですから、マルクス・エンゲルスはエコローギッシュという言葉を、言葉としては使うべくもなかったのでありますが、彼らが極めてエコローギッシュな発想をしていることは、今日では周知のところであります。」248P

「ところで、人間生態系の場合、植物生態系や一般の動物生態系の場合と違って、主体と環境との相互関係の在り方に或る著しい特質が認められます。それは、シンボリックにいえば、道具という仲介手段を用いて、目的意識的に、環境に対する働きかけがおこなわれる点にあります。そして、この対象的活動たる生産活動は、協働 Zusammenwirkung として営まれ、そのことにおいて生産関係が社会的に編制されます。／こういうエコロギッシュな編制、しかも人間に特徴的なエコロギーの結節環ともいうべき「生産活動」の在り方に定位すること、そこに唯物史観の視座が存するのであり、この視座に定位して主体と客体との統一性、人間と自然との実践的な統一性が把え返されていること、ここにマルクス“哲学”の大きな特質があるともうせるでありましょう。」248-9P

第八段落――哲学の死滅か、将来の哲学の新しい構成か 249-54P

「私は只今、マルクスの“哲学”と申しました。だが、マルクスは哲学のアウフヘーベンを志したのであって、哲学としての哲学を樹てようとしたわけではなかった筈ではないのか？　慥かにそうであります。が、単に哲学の止揚とか、理論から実践へとか言っただけでは、原理上の構えとしても、事柄がそれで済んでしまうわけではありません。／ここにおいて「批判」という概念があらためて問題になります。それは経済学のアウフヘーベンを図ったマルクスが理論の領域では、「経済学批判」の体系を構築しようとしたこととも通底いたします。」249P *一八五八年のラッサール宛の手紙の引用を挿んで*、

「マルクスは、経済学という理論の分野において、体系の叙述であると同時に体系の批判であるような kritische Darstellung を志向しております。その批判的叙述は、具体的な事象を網羅的に記述するものではなく、カテゴリー、つまり、基本的諸概念の批判的叙述であります。／では、カテゴリー批判というときの「批判」とはどのように意味での批判なのであるか？ カテゴリーの使用とカテゴリーの批判との結合ということは、ヘーゲル弁証法においてもモチーフの一つになっている事柄でありますから、余り簡単に言ってのけるわけには参りませんけれど、即自的な事態の対自的な把え返しというモメントが絡むことまではまず間違いありますまい。」249-50P

「マルクスは『資本論』のなかで、ブルジョア階級のカテゴリーについて、それは「商品生産というこの歴史的に規定された社会的生産様式の生産関係に対して社会的に妥当する、それ故に客観的な思想形態である」旨を述べております。現行の歴史的文化的な体制下において「社会的に妥当する」gesellschaftlich gültige「それ故に客観的な」also objekttive 思想形態、これの批判的叙述 kritische Darstellung が問題であります。――「社会的に妥当する、それ故に客観的な」思想形態ということは、当該の社会に内在的な視座においてはまさに真理とされるもの für es には真理とされているものにほかなりませんし、これを体系的に叙述することが一要件をなしますけれども、しかし、それを単に追認するに止まってはならない。それは「歴史的に規定された」一定の生産関係に対してのみ妥当するものであっ、無条件な永遠の真理ではない。当事意識にとって(für es に)真理とされているもの、われわれにとって(für uns に)は決して端的な真理ではない。さりとて、学知の立場における「われわれ」としては、当事主体たちにとって真理とされているものを単に真ならざるものとして斥けるだけでは済みません。われわれとしては、それがごくナチュラルな、必当然的な真理とされている存立構造を解明してみせ、即自的な「真理存在」の被媒介的な存立構造を究明してみせねばなりません。そのためには、即自的に真理とされているものをその基礎カテゴリーから体系的に叙述しつつ、且つ、併せて、それの「批判」――一種のイデオロギー論的批判というかたちでの“認識批判”、認識論的・存在論的批判――をこれまた体系的に遂行してゆくことが要件となります。――因みに、『資本論』からの先の引用は、有名な「商品の物神的性格とその秘密」の節からの援用なのでありますが、当座の論脈で申せば、後期マルクスの「批判」とはさしあたり、即自的な事態の被媒介的存立構造を分析し、それの歴史的・社会的な相対性とその由って来たるところを für uns に解決しつつ、体制内的な当事意識にとっての即自的な“客観的”事態を認識批判論的に、剴切には、イデオロギー批判論的に対自化することの謂いとなりましょう。」250-1P・・・*弁証法的途行き*

「私としては、しかし、マルクスがいわゆる哲学的体系を著作の形で書こうとしなかったことを承知のうえで、なおかつ、マルクスの哲学的体系を云々することができると思います。エンゲルスが、哲学の将来の消滅を予言しているのにも、但し書きというか、条件がついているのでありまして、彼は「近代の唯物論は本質的に弁証法であって、もはや諸科学の上に立つ哲学を必要としない。それぞれの個別科学に対して、事物および事物に関する知識の全体的聯関のなかで、各自が占める地位を確然と理解するようにという要求が提出されるやいなや、全体的な聯関を扱う特別な学問は不要になる。そのときには、これまでの哲学のなかで独立に存続するのは、思考とその諸法則に関する学問――形式論理学と弁証法である。その他のものは、すべて、自然と歴史に関する実証的な学問に解消してしまう。」云々。(『反デューリング』)という言い方をしているのであります。現状では、しかし、諸科学がそこまでいっていないかぎりで、エンゲルスですら哲学という「特別な学問」がまだ必要と認めるでありましょう。只今の引用では「全体的聯関」という一点が強調されておりますけれど、認識批判論的な処理――ヘーゲルがカテゴリーの「使用」と「批判」とを弁証法的に結合したのと同趣の手続――ということが併せて問題のわけでして、エンゲルスとしては将来、諸科学自身が即自的な“客観的”“真理存在”の叙述だけでなく、

当該の批判的手続を体系に内在するようになるものと予見しつつ、先のように書いた筈であります。となれば、将来的には、哲学と諸科学の相対が別々に並存するのではなく、再び統一されて、謂うなれば諸科学の総体が一種の哲学的体系になる。但し、直接的に対象知に関わるのではない「思考とその諸法則に関する学」――これは単なる形式的論理の域にとどまるのではなく、認識論的な次元をも構造的契機とする弁証法を含む――はなお対象知的体系とは別に「独立」の部門をなすであろう。このような含意になっているものと解されます。」252-3P・・・*エンゲルスからの引用文について、廣松さんは、そもそも一体化してとらえることへの疑念も押さえていますが、「マルクス・エンゲルス」という表記が気になっています。熊野さんがこの著の文庫本の解説の中で、「マルクス／廣松物象化論」という表現をしていることも参考になります。『『ドイツ・イデオロギー』におけるエンゲルスの主導説もあり、経済学においてもマルクスよりも先行的に入っていったということが定説化していっていますが、後期におけるここでも引用されている「哲学の死」の宣言やエンゲルスの弁証法の法則的とらえ返し、これはエンゲルス自体の責任か、ロシア・マルクス主義のドグマ的とらえ返しか、があるにせよ、エンゲルスの「ヘーゲルへの先祖返り」というようなことのとらえ返しが必要になっています。たとえば、後期エンゲルスは「物象化」という概念をどうとらえていたのか、物象化論からすると、「哲学の死」の宣言はできなかったのではないかとわたしには思えるのです。哲学は神の死を宣言しました、だが、まだ宗教はなくなっていない、なのに、エンゲルスは哲学の死を宣言しました。また、弁証法を法則としてしかも、法則の図式化のなかで、法則を物象化しているようにとらえられるとき、「エンゲルスに物象化論はあるのか？」という疑念が湧いてきます。勿論、哲学や「物象化論」が「上に立つ」などということではなく、「通底する」とのとらえ返しなのですが。因みに、法則とは、真理とは、絶対的真理＝神を否定する立場からは、共同主観的な客観的妥当性であり、武谷技術論の「客観的法則性の意識的適用」ということに準えれば、仮説としての法則ということを立てて、上向法的に展開して行き、その妥当性が有効かどうかを自己吟味していく、ときにはその法則自体をもアウフヘーベンしていく、そういう所での法則性だと言いえるのではと考えています。*

「マルクスにとっての哲学は、「思考とその一般的法則の学」はひとまずさておき、対象知的体系に関していえば、彼が「経済学批判」において構想した構案と構制、すなわち、即自的に“客観的”な事態の「体系的叙述であると同時にその叙述を通じておこなうジステームの批判」、これを推及して考えることができるのではないでしょうか。／この“哲学”はマルクスの経済学が普通の意味での経済学ではなく、「経済学批判」であるのと同趣的に、普通の意味での哲学ではなく「哲学批判」――即自的な世界像の批判、既成的世界観のイデオロギー論的批判と弁証法的に統合された体系的批判、批判的体系――という性格をもつ所以となりましょう。それは、日常的・現実的意識の批判、そして歴史的・社会的に相対的なこの意識の地平内での“体系知”たる既成的諸学の「批判」、そのような体系的批判＝批判の体系として存立する筈のものであります。」253-4P

第九段落――「批判的叙述＝叙述的批判」が「体系的」である必要性　254-7P

「これはマルクスに限りませんが、人間的世界の部分的改良を目指すのではなく、総体的な変革を志向する場合、そしてその総体的変革の諸条件・諸方策、そして変革後のヴィジ

ョン、これを学理的に闡明*(せんめい)*する場合には、局部的な研究ではだめなのであって、まさに人間的世界の相対をシステマティックに研究誌体系的に把握することが必要となります。マルクスの場合は、現にそうなのでありまして、あまつさえ、当の変革が単なる社会体制の変革という域にとどまらず、そのための一条件としても、またそれに伴うであろう一帰結としても、世界観の総体的変化と不可分である以上は、体系性、体系的統一が当然必要となる所以なのであります。」254P

「私は、先に、ヘーゲルやヘーゲル学派からマルクスが継承したモチーフとして、主観性と客観性との統一、人間と自然との統一、ということを云々し、それがマルクスにおいては――バウアー的な「批判的批判」の場においてではなく、またその批判的主体＝人類的自己意識をプロレタリアートに置換するという一時期の中間的階梯での構案に止まることなく――生産の場面、しかも人間的生態学的な鍵鑰たる「生産」の場面に定位するという仕方で結実したことを申し述べ、唯物史観のこの基本的視座のもつ“哲学”上の意義を示唆しておきました。」255P

「因みに申せば、ヘーゲルの「絶対精神」ないしバウアーの「自己意識」をプロレタリアートないしその階級意識ということで置換し、そこでフィヒテ・ヘーゲル的な疎外論・外化論のロジックで、当の「大主体」の自己外化と自己獲得を説くにとどまるとすれば、そしてバウアーが「批判」ということで主観性と客観性との実践的統一を説いた構図に滞留するとすれば、この疎外論の構制はまだ唯物史観以前的と評されねばなりますまい。ルカーチは、疎外論と物象化論との離接不全ということにも禍されて、そして彼がマルクスの労働論や対象的活動論の射程を若きヘーゲルのそれ(しかも彼ルカーチが一面的に矮小化した限りでのヘーゲルのそれ)に“還元”する位相でしか把えることができなかったために、突き放した言い方をすれば、ルカーチはマルクス主義をバウアー派的な準位に押し込めてしまっております。」255P・・・*ルカーチ「階級意識史観」批判*

「ヘーゲルは単に愛知たるフィロゾフィーではなく、体系知たるヴィッセンシャフトでなければならないことを説きました。その体系知が、彼ヘーゲルの場合、宗教ないし神学的な体系と内容的には重なることを先刻申しておきました。」256P

「ユークリッド幾何学と神学とか、古典力学(ニュートン物理学)とか、この種のものも体系性を誇るにせよ、それは所詮、世界の総体を把えたものではなく、部分的な体系知にすぎない。その点、総体的な体系志向というものは、なるほど神学に強くみられたと申せます。」256-7P

「人々が、しかし、体系性と神学を連想するのは、おそらく、歴史的な偶有的事情のほかに、体系性の要求と理論の絶対性の要求とを二重写しにするという事情も介してのことと思われます。この点で申せば、マルクス主義の場合、いな、さしあたりマルクス思想の場合、体系性は決して絶対性と二重写しにはされておりません。けだし、マルクス思想は、唯物史観からして、まさに理論の歴史的相対性を自覚している所以であります。」256P

「マルクスが、歴史的相対性の自覚のもとでもなお体系的叙述、批判的叙述の体系性を志向するのは、――アンシクロペディスト*(百科全書派)*等の場合とは「体系」ということの構制が異なるにせよ――世界の総体的変革、現実界ならびに思想界の総体的な変革を課題とするからにほかなりません。」257P

第十段落――唯物史観の押さえ　257-9P

「ところで、唯物史観が基本的な視座を据える「生産」という人間生態系の鍵鑰に即するとき、生産関係の変革、これが枢軸をなすことはあらためて詳論するまでもありますまい。世界の総体的把握は、この視軸に定位しておこなわれます。そして、「生産」という「実践」、そこに視座を据えた人間と自然の統一、主観性と客観性、個別性と普遍性、自由と必然、等々、等々の統一的把握、これは世界観の全体に関わるものであって、近代思想におけるが如き「歴史」「社会」という――「自然界」に対する――単なる半球に関わるものではないのであります。そして、この史観の開示する Historisppheは、まさに実践の哲学、行為の哲学、つまり、ヘーゲル左派のチェシコフスキーやモーゼス・ヘスが不充分な形で構想したところのものをアクチュアルに止揚・体現する所以のものともなっております。この意味で、唯物史観は、決して自然弁証法とやらと並ぶ史的唯物論なる“半球”ではありませんし、「実践的唯物論」は応用篇の実践哲学といったものではありません。」257-8P

「かように「唯物史観こそがマルクス哲学の基軸である」旨を申しますと、人びとのなかには「それはおかしい」「マルクス哲学は、第一に唯物弁証法＝弁証法的唯物論であって、それを自然界に応用・伸長することで自然弁証法が成立し、また、それ(弁証法的唯物論)を歴史界に応用・伸長することで史的唯物論が成立するのだ云々」、このように指摘されるむきもうろうかと思います。／私としては、このような通念が、第二インターのカウツキーあたりから成立し、それがプレハーノフやレーニンによってロシア・マルクス主義の教義体系に持込まれた事情を“理解”しないではありませんし、教科書風に整理するさいにそのような図式に押し込むことの一定の“有効性”や“便利さ”を認めないわけでもありませんけれど、原理的にいえば、それはマルクスにとって哲学とは何であったかをおよそ理解せぬ謬見であると断ぜざるを得ません。この間の事情につきましては『マルクス主義の理路』(勁草書房から、本年[一九八〇年]の夏に新版を出しました)のなかで、或いはまた共著『現代哲学を考える』(有斐閣刊)のなかで、詳しく論じておきましたので、ここでは繰り返さないことに致します。」258P・・・*？弁証法を法則としてとらえることの批判*

「本当は、ここで、唯物史観とエコロジーの関係について、エコロジーが即自的にとっている論理構制を、構造主義やルーマン的な機能主義との種差(ディフェレンティア)をも明らかにしつつ、弁証法的な存在観(単なる論理ではない)と反照させる作業を試みたいところでありますが、これは別の機会に譲ることに致しまして、残された時間であと一つだけ必須の論点にふれておきたいと念います。」258-9P

第十一段落――理論―実践の哲学としてのマルクス理論

「哲学が哲学であるかぎり、哲学の実践的実現による実践的自己止揚と言っても、それは所詮、哲学の内部では完結しないではないか、諸君はこの旨を指摘されることでありましょう。これは初期のマルクスがプロレタリアートに托した課題でもありました。当の構制は、後期のマルクスにおいても、より一層具体化された相で維持されていると私は考えます。がしかし、経済学というか『資本論』の範囲に関してさえ、人々は、理論はザインを究明することはできても、そこから論理必然的に革命の必然性を説くことはできないし、いわんや、革命的実践のゾレンを論証することはできない旨を述べ立てます。・・・・・「理論」と「実践」とは、こういった次元を超えた場面で結合されてしかるべきです。そして、

その配備をマルクスは少なくとも半ばは意識的に立てていたように観ぜられます。」259P
「私は、この春に出しました『弁証法の論理――弁証法における体系構成法――』という本(青土社刊)のなかで、für es, für uns の für uns 構制から更に歩を進めて、本源的に対話の論理たる弁証法にあっては、“著者”と“読者”との対話的構制ということを自覚的に勘案した体系構成法に定位すべきことを論じておきました。」259P
「マルクスの理論体系と実践的“呼掛”との関係、著者たるマルクスと読者たる人々、これら叙述体系の“外に”立つ両者が叙述体系を介してどう関わるか、対話(呼掛と呼応)の構制がマルクスの体系構成法(叙述内容ではない)においていかなる配慮をもって処置されているか、この間の事情にふれる前梯としてであります。」260P
「マルクスの場合、そして、これは誰しもそれ以上を叙述そのことにおいては期すことができない道理なのですが、存在命題から当為命題を形式論理的に導出・論定することはできませんし、理論的認識(それが当為命題を含む実践学的な命題であっても)における es と wir との一致、さらには、著者と読者との見解的一致が成立したとしても、そこから論理的に当為的実践が導かれるわけではありません。／人々が、もし、理論体系、叙述された文章内容を自存化させ、それが自己完結的に、その内部で、いわゆる“革命の必然性の論証”をおこなうことができ、一定の当為を論理必然的に論証・導出できると考えるとすれば、それは「著述」というものに対する一種の「物神崇拝」フェティシズムに陥っていることの一表白であります。」260-1P・・・*法則ということのとらえ返しにも通じること*
「理論体系、思想の体系的叙述は、その著述内容の“外部”に立つ「著者」と「読者」との媒介体であって――これがしばしば著者にとって所期の Resultat *(成果)*をもたらすところから、その媒介性の構制を忘れて、人々はとかく著述を「物神化」する所以にもなりますが、自己完結的に、論証的“納得”や況んや当為的実践を“論理的に導来”するものではありません。」261P
「私どもは、叙述そのことの物神化を斥けつつ、著者と読者とのアクチュアルな関わり方(それには「叙示」の“知解”、「陳述」への肯・否定的な“態度決定”、「呼掛」への“応接”といった契機が表現論の意味構造の場面で既に存立するのですが、ここでは立入りません)、これを自覚的体系構成法に“繰り込む”かたちで勘案する次第でありますけれども、所期の実践は“陳述的呼掛”に対する読者の側の“決意的応答”に俟ってはじめて起動します。理論的体系の叙述は、それ自身が総じて“一つの”呼掛でありまして――なるほど、叙述(理解)の展開過程が不断に著者と読者とのあいだの呼掛・応答という構制になっているにしても、著者に対して一つの総体的応答がアクチュアルに返って来るのは、読者が“理解”の域を超えて現実的に反応する場面でのことでありますから、著者という人物と読者という人物とのあいだの“対話”的相関が(論述の逐次的“知解”という場面での“対話的進行”の域を超えて)顕現するのは、一つの著述を或る種の仕方で受け留めて反応することにおいてのみ(著述を介した著者と読者とのこういうアクチュアルな“対話”的関わりにおいてのみ)、所期の実践が読者において発現する次第になります。」261-2P
「このさい、マルクス式に言えば「存在が意識を決定する」「存在が無意識をすら決定するのであって、一定の読者における応答の在り方を予料することができます。」262P
「マルクスにとっての哲学とは、それが批判的叙述＝叙述的批判という一つの理論的体系

であるかぎりではなるほど現行的世界の「同時に批判でもあるごとき体系的叙述」、世界の被媒介的存在構造の対自的ベグライフェン（*把握*）でありますけれども、これがそれ自身として“読者”への“呼掛”であり、それがしかるべき社会的存在者たるプロレタリアートの階級的実践を蓋然的に興発することにおいて「実践の哲学」たりうるのであり、当の実践というアクチュアルな“批判”において自己止揚＝自己実現するもの、斯様な構制になっていると申せましょう。」262-3P

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 078

・「ＮＨＫスペシャル　封じられた“第四の被曝（ひばく）”　―なぜ夫は死んだのか」2024.9.15 21:00～21:54

見出しに「私たちの社会が、その存在すら忘却してきた被ばく事件がある。１９５８年、海上保安庁の船「拓洋」と「さつま」の乗員１１３人が被ばく。その１年後、乗員の永野博吉さんが急性骨髄性白血病で命を落とした。妻の澄子さんは事件の実態を知らされずにその後の人生を過ごしてきた。１９４５年、広島・長崎への原爆投下。１９５４年のビキニ事件。それらに次ぐ“第四の被ばく”とも言える知られざる事件。その実態に独自取材で迫る。」とあります。

巻頭言に取り上げた映像です。アメリカの秘密資料が開示されたことによって作られた番組で、核を巡る政治と科学の悲惨さを痛感しています。被爆二世として、放射線被害ということをきちんと押さえ、拡げ・深めていく作業をしなければならないのですが、せめて、このような発信だけでもとの書き込みです。

インターネットへの投稿から

2024.10.1　asahi.com の記事の引用へのコメント

この分析は保守とファシズム―極右を混同しているのではないでしょうか？　ファシズム的ことは改革を装って出てきますが、「改革派保守」などではないのではないと思います。高市さんの都市部での支持は、ネトウヨ的なことです。

(写真略)

asahi.com

躍進の高市氏、地方回りとネット戦術奏功　石丸氏支援者が SNS 拡散：朝日新聞デジタル

過去最多の 9 人が名乗りを上げた自民党総裁選で、高市早苗経済安全保障相が 1 位で決選投票に進出、石破茂新総裁とデッドヒートを繰り広げた。後ろ盾の安倍晋三元首相の亡き後で苦戦も予想されたが、善戦の理由は何…

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 158 号」アップ(24／10／３)

◆「反差別資料室Ｃ」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年５月の末に１年余ぶりにリアップしました。

◆メインホームページ「反障害－反差別研究会のＨＰ」のⅣ．Ｆ[廣松ノート] http://www.taica.info/hiromatunote.html に『弁証法の論理』をアップしました。

(編集後記)

◆今年一杯は月二回発刊を続ける予定です。来年からは月１回に戻し、宿題の同時並行的掲載に踏み込でいく予定です。

◆巻頭言は、ＮＨＫのドキュメンタリー番組でとりあげていた「第四の被ばく」を急遽取り上げました。「映像鑑賞メモ」ともリンクしています。被ばくの問題は、補償を切り詰めるために、近代知の地平でしかないパラダイムの「因果論」を「現代」と言われる時代に、使い続けていること、こんな旧いパラダイムをいまだに使い続けている非「科学的」なこと、その路線で「科学的」などということば使っているのは、「恥知らず」としか言いようがないのです。補償の論理を（基本生活）保障に切り替えていくしかないのです。

◆読書メモは、『物象化論の構図』の５回に分けての４回目。前の「後記」に書きましたが、［廣松ノート］の再読とノート取りは、次の『存在と意味』に入っています。「来年のことを言うと鬼が笑う」のですが、来年中には第一次学習を終えて、第二次学習に移行する予定です。

◆映像鑑賞メモに書いたことは、巻頭言とリンクしています。フェイスブックでも発信しました。ほぼ、同じ内容なので、「インターネットへの投稿から」は割愛しました。

◆三つの宿題、「社会変革への途」、「障害関係論原論」（取り急ぎ「序説」）、「反差別原論」（取り急ぎ「序説」）にボツボツとり掛かります。実は今回の巻頭言に、「障害関係論原論」の序文的文を書いていたのですが、急遽、挟み込み原稿を入れたので、そして、時事ネタが続くので、それは年末か、年始に廻します。

◆マスコミが政権アシストの「第四の権力」の役割を担っていて、そして野党が保守化していっています。金権政治は、「法の下への平等」の幻想をゆるがしているのですが、そもそも資本主義社会は、「金の、金で支配する社会」システムですが、「嘘っぱち」の「法の下への平等」の幻想なしには「民主主義社会」を標榜する社会は維持できないのです。なんとか、ごまかしを積み重ねていっていますが、それを暴く政治勢力が、ほんの一部を除いて「表」の政治で消えてしまっているのです。「社会変革への途」をちゃんと書いて行こうと思っています。

反障害－反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られていますが、そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくならない」とか「社会の基本構造は変わらないという意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

E メール　hiro3.ads@ac.auone-net.jp　(三村洋明)
反障害―反差別研究会　HP アドレス http://www.taica.info/
「反障害通信」一覧　http://www.taica.info/kh.html
反差別資料室 C　https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3
ブログ「対話を求めて」http://hiroads.seesaa.net/
反差別資料室Ａ　https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1